

全天候型施設の基本方針（案）について

- 1) 全天候型施設の方向性検討フロー
- 2) 芦屋港活性化基本計画で示される考え方
- 3) 全天候型施設整備における現状と課題の整理
- 4) 全天候型施設の基本方針（案）

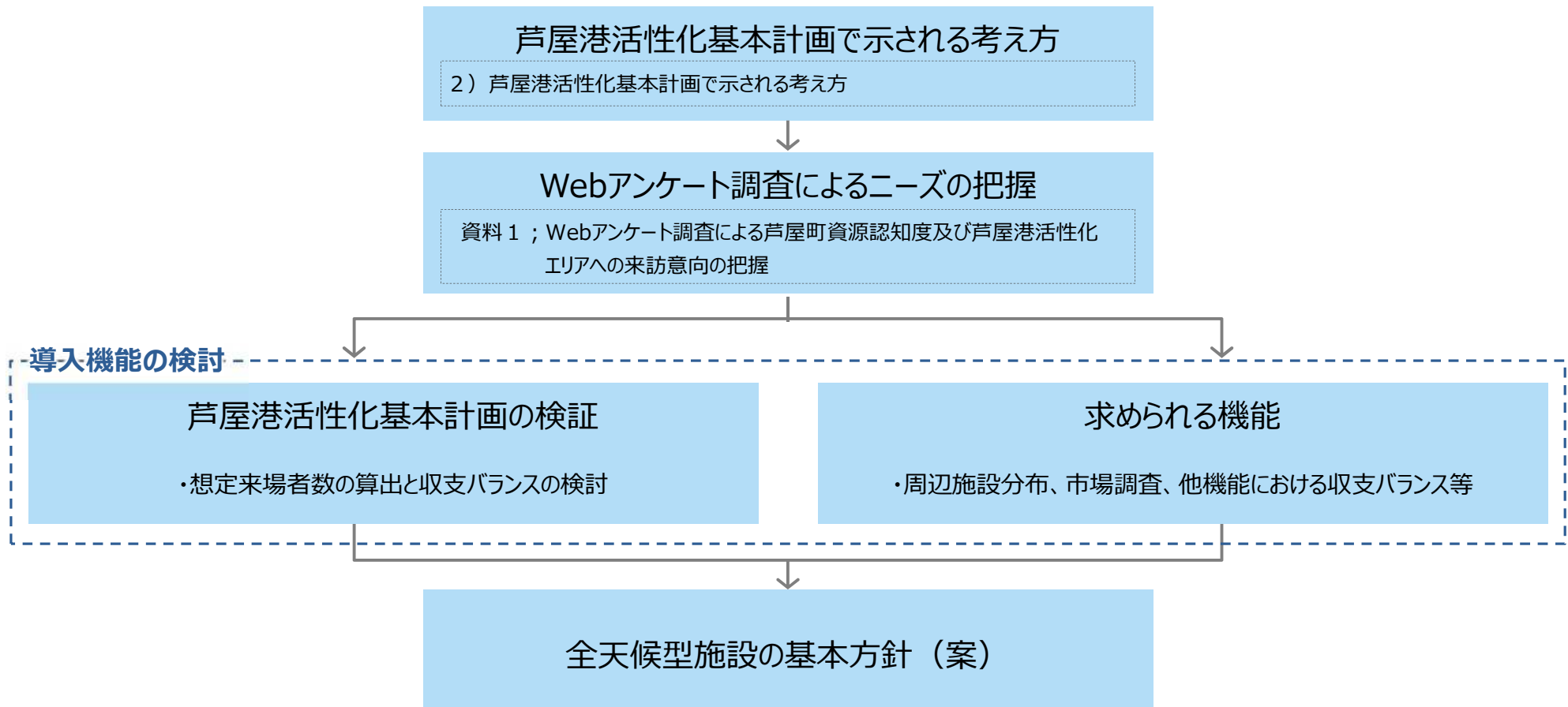
令和 3 年 4 月 27 日

芦屋港活性化推進室

(2) 全天候型施設の基本方針（案）について

1) 全天候型施設の方向性検討フロー

- 全天候型施設の方向性は、下記のフローに沿って検討を行いました。



(2) 全天候型施設の基本方針（案）について

2) 芦屋港活性化基本計画で示される考え方

- 芦屋町の観光特性として季節変動が大きく特に冬季の集客が課題。このため、通年での来訪者確保を目的とした観光集客施設として位置づけ、施設を新設。
- 活用方法のひとつに、芦屋町のキラーコンテンツである「砂像」を展示することを想定（3ヶ月間程度）。
- その他の期間は一般貸出を積極的に行い、天候に影響されないイベント開催ができる施設として活用。
- 広場は、賑わい創出の効果を発揮するものとして、様々なイベントや体験プログラムを行う目的とし、イベント時に求められるブースやキッチンカーの出展に対応した電源や給排水など質の向上に資する設備を整え、付加価値を高める。
- 具体的な活用方法やイベントの運営方法など関係者による検討が必要なこと、町民に親しまれる様々な利用が促進できるよう、担い手の育成や賑わい創出の検討と併せた具体的な活用方法などの検討が必要。



施設配置図（芦屋港活性化基本計画・第1回変更計画書より）



全天候型施設イメージパース（アイレベル）

➤施設規模	広場	約10,000㎡
	全天候型施設	約2,000㎡
➤施設構造	鉄骨造、2階建て（吹き抜け）	
➤概算事業費	広場	約261,400千円（税抜）
	全天候型施設	約420,000千円（税抜）

(2) 全天候型施設の基本方針（案）について

3) 全天候型施設整備における現状と課題の整理／現状と課題及び戦略として考えられる方向性

- 前頁までに示した現状分析結果を踏まえて、現状と課題、戦略として考えられる方向性を整理しました。※資料1より再掲

; 全天候型施設に関連

【芦屋町の観光特性】

- ・北九州都市圏域からの来訪者が多く、芦屋町来訪者の約96%が日帰り客である。
- ・あしや砂像展、花火大会など町外から人を呼べるイベントがある。芦屋町におけるイベント集客力は、隣接する地域よりも高く、人口を上回る来訪者を確保している。
- ・芦屋町観光における主要な目的地となっている施設やイベントは天候に大きく左右される傾向にある。
- ・7月と8月だけで、年間来訪者の約50%を占める。海水浴シーズンや多くのイベントが開催される夏・秋（7月～11月）と、冬～春の年間来訪者数の差が大きい（年間を通じた集客ができていない）。冬期は風が強く、海も時化が多い。砂が舞うこともある。
- ・年間を通じてイベント等では来訪があるものの、町内を回遊していない。

【芦屋港周辺の施設分布状況】

- ・芦屋港エリアは、周辺に、芦屋海水浴場、芦屋海浜公園、レジャープールアクアシアン、芦屋釜の里、国民宿舎マリテラスあしやなどが立地している（芦屋町への訪問目的の多くを占めるスポーツ・レクリエーション施設が隣接している）。
- ・町内に寺社仏閣などの歴史的資源が多く、芦屋釜の里や芦屋歴史の里などの文化施設や、航空自衛隊芦屋基地やポートレース芦屋（屋内遊び場、コンサートに対応できる多目的施設）がある。
- ・芦屋港周辺に立地する施設と類似する施設（屋内遊び場、多目的ホール等）は、導入機能として想定しづらい。

【コロナ禍における変化】

- ・コロナ禍における行動変化（外食・趣味・娯楽目的を中心に自宅周辺の活動が増加）に対応した日常使いの視点も踏まえる。
- ・コロナ禍において、レジャープールアクアシアンの営業休止やイベントの中止等による影響で来訪者数が減少しており、マリテラスあしやの利用者数も減少した。
- ・コロナ禍において、3密を回避できるアクティビティとして、レンタサイクルの需要やサイクリストの来訪が増加している。
- ・コロナ禍において、釣りや公園などの利用者（特にファミリー層）が増加している。
- ・WEBアンケートにより、芦屋港周辺エリアほど来訪意向や頻度が高い状況であるため、日常的な利用も見込める。リピート層獲得のための継続的な取り組みも必要。

【情報発信】

- ・観光情報を発信しているが、観光情報の発信を知らない人が多い。
- ・情報発信は各団体がそれぞれで行っており、一体的なプロモーションや情報のマネジメントができていない。
- ・情報発信力が乏しい（どのターゲット層に、どのような周知方法で、どのように伝えるかなどのマネジメントが欠けている）。
- ・地域資源を活かした観光の推進に向けて積極的な町のプロモーション活動の展開が必要。

【まちづくり活動の担い手】

- ・町内の様々な団体との交流が少なく、情報共有等、事業者間（業種間）との連携が十分でない。
- ・地域活動やボランティア活動の担い手が不足している。
- ・「人を育み 未来につなぐ あしやまち」を将来像とし、まちづくりの礎である「人」の育成・発掘を推進。
- ・シビックプライドの醸成として郷土心を醸成し、地域への愛着と定着を図るための取り組みを推進。

【戦略として考えられる方向性】

① 周辺施設と連携し、アクティブシニア層やファミリー層をターゲットとした観光拠点の形成

② 町内の回遊性向上による町への経済効果に繋がる仕組みの構築

③ 近隣地域に比べ特色化が図れる観光拠点形成による集客の確保

④ 天候に左右されない安定的かつ定期的な集客、日常使いの視点での消費確保

⑤ Withコロナの観光動向変化を踏まえ、屋外アクティビティの需要増加に対応した新規来訪者の確保

⑥ 戦略的な情報発信

⑦ キーパーソン（担い手）となる人材の発掘や育成による賑わいの持続性確保

⑧ まちづくりに関心のある人への支援やネットワークづくりの推進

⑨ イベント等をきっかけとして多くの町民を巻き込み、住民の機運を醸成

(2) 全天候型施設の基本方針（案）について

4) 全天候型施設の基本方針（案）

- 全天候型施設の基本方針（案）について、次のとおり整理しました。

【芦屋港活性化基本計画の検証】

- 「砂像」の屋内展示機能について検証を行った結果、「砂像」は芦屋港周辺エリアにとって、最も集客力のあるコンテンツであるといえます。
- 現在開催している「あしや砂像展」は芦屋町の特徴的なコンテンツであり一定の経済効果があるものの、課題（ビジョン・コンセプトの設定、来場者の満足度向上、イベントの収益増、体制構築、担い手確保、町内回遊・経済波及効果の増など）を解消することが求められます。こういった課題を解消し、継続することは芦屋町の魅力向上に大きく貢献すると考えられます。
- 芦屋町において「砂」は、オンリーワン資源である「芦屋釜」に通じるもので、「砂」をストーリー展開することが効果的といえます。
- 「砂像」の屋内展示を行うにあたっては、現在のイベントと比べて、砂像の入れ替え時の費用が大きく、保管場所も必要となるため、短期間での展示では収益性が非常に悪く、全天候型施設を多目的に活用するよりも、通年の砂像展示（常設展示）として活用することが望ましいと考えられます。この場合、「あしや砂像展」は、これまでどおり期間限定のイベントとして施設の屋外広場を活用することとします。

【求められる機能】

- 芦屋港周辺エリアにおける集客機能は、「砂像」・「サイクル」が考えられます。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響から大きく社会経済環境が変化している中、一定期間のニーズ調査及び実態把握を行い慎重に判断することが求められます。
- 「サイクル」機能については、コロナ禍における屋外レジャーのニーズの高まりも影響し、ポテンシャルが十分にあるといえますが、収支バランスを把握するためには、一定期間のニーズ調査及び実態把握を行う必要があります。

(2) 全天候型施設の基本方針（案）について

4) 全天候型施設の基本方針（案）



【全天候型施設の基本方針（案）】

- ① 全天候型施設の活用は、「砂像」の屋内常設展示（砂像展示専用施設）を基本とします。
- ② ただし、社会経済環境が大きく変化しているため、現時点で方針を決定するにはリスクが大きく、芦屋港周辺地域に絞った一定期間のニーズ調査及び来訪者動向などの実態を把握するための調査及び検討を引き続き行います。
- ③ あしや砂像展は、芦屋港周辺エリアにおいて、最も集客力のあるコンテンツであり、施設内での展示を行う場合、期間限定のイベントとの組み合わせによるリニューアルが必要です。ただし施設整備までの間は、課題を解消したうえで継続します。
- ④ サイクル機能の導入の可能性を持たせ、既存港湾施設官民連携活用事業と連携し、一定期間のニーズ調査及び実態把握を行うこととします。